農民

復刻版　全五巻・別冊一

犬田卯ほか編

主要執筆者――石川三四郎・大槻憲二・小川未明・加藤一夫・渋谷定輔・白鳥省吾・中村星湖・鑓田研一・吉江喬松・和田伝

一九二〇年代後半から三〇年代――農村窮乏の現実に呼応しつつ刊行された農民文学運動雑誌の復刻版！

農民の解放と自立、反ブルジョア、反都会文学を謳い、プロレタリア文学とともに支配権力に果敢に挑んだ異色の文芸誌――

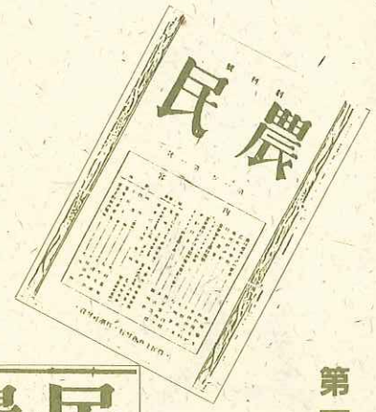
――不二出版

第一次～第五次
一九二七（昭和二）年～一九三三年

推薦●住井すゑ・小田切秀雄・林宥一

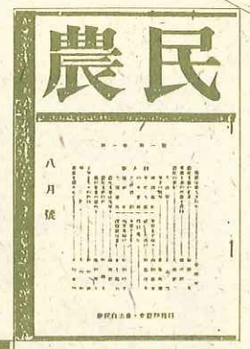
揃価●八五、〇〇〇円（税別）

復刻版『農民』収録内容〈第一次～第五次〉



第一次『農民』

農民文芸会 発行
犬田卯・吉江喬松・渋谷定輔・大槻憲二・白鳥省吾・中西伊之助・中村星湖・藤森成吉・帆足図南次・柳田国男・鑓田研一ほか執筆
一九二七(昭二)年一〇月～一九二八年六月〈第一巻一号～第二巻六号〉



第二次『農民』

農民自治会 発行
犬田卯・大槻憲二・小川未明・加藤一夫・鑓田研一・和田伝ほか執筆
一九二八(昭三)年八・九月〈第一巻一・二号〉

第三次『農民』

全国農民芸術聯盟 発行
犬田卯・李均・加藤一夫・武田勝義・延島英一・松原一夫・鑓田研一ほか執筆
一九二九(昭四)年三月～一九三二年一月
〈第一巻一号～第四巻一号〉

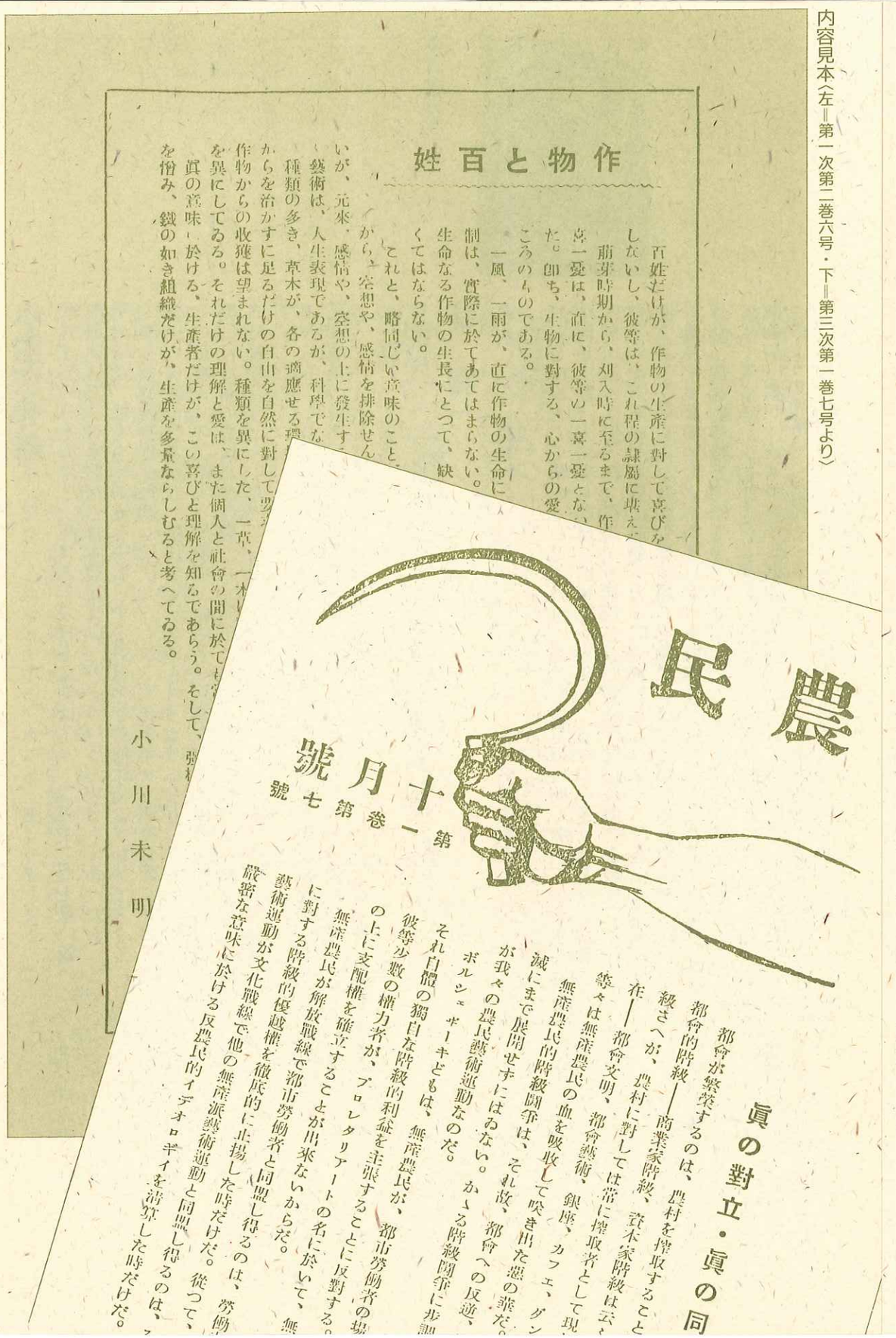
第四次『農民』

農民自治協会全国聯合 発行
鑓田研一・石川三四郎・和田伝ほか執筆
一九三一(昭六)年一〇月・一九三二年一月
〈第一巻一号・第二巻一号〉

第五次『農民』

農民作家同盟 発行
犬田卯・加藤朝鳥・住井すゑほか執筆
一九三一(昭七)年一二月～一九三三年九月
〈第一巻八号～第二巻六号〉

内容見本〈左＝第一次第二巻六号・下＝第三次第一巻七号より〉



作物と百姓

百姓だけが、作物の生産に對して喜びを
しないし、彼等は、これ程の隷屬に堪え
萠芽時期から、刈入時に至るまで、作
喜一憂は、直に、彼等の一喜一憂とな
た。即ち、生物に對する、心からの愛
ころのものである。
一風、一雨が、直に作物の生命に
制は、實際に於てあてはまらない。
生命なる作物の生長にとつて、缺
くてはならない。
それと、略同じい意味のこと
から、空想や、感情を排除せん
いが、元來、感情や、空想の上に發生す
藝術は、人生表現であるが、科學でな
種類の多き、草木が、各の適應せる環
からを治かすに足るだけの自由を自然に對して要
作物からの收獲は望まれない。種類を異にした、一草、一木
を異にしてゐる。それだけの理解と愛は、また個人と社會の間に於ても
眞の意味に於ける、生産者だけが、この喜びと理解を知るであらう。そして、
を憎み、鐵の如き組織だけが、生産を多量ならしむると考へてゐる。

小川未明

農民

第十一卷第七號

眞の對立・眞の同

都會が繁榮するのは、農村を搾取すること
都會的階級――商業家階級、資本家階級は云
級さへが、農村に對しては常に搾取者として現
在――都會文明、都會藝術、銀座、カフェ、グン
等々は無産農民の血を吸收して吳き出た惡の華だ。
無産農民的階級鬪爭は、それ故、都會への反逆、
滅にまで展開せずにはゐない。かゝる階級鬪爭に步調
が我々の農民藝術運動なのだ。
ボルシェヴィキどもは、無産農民が、都市勞働者の場
それ自體の獨自な階級的利益を主張することに反對する。
彼等少數の權力者が、プロレタリアートの名に於いて、無
の上に支配權を確立することが出來ないからだ。
無産農民が解放戰線で都市勞働者と同盟し得るのは、勞働
に對する階級的優越權を徹底的に止揚した時だけだ。從つて、
藝術運動が文化戰線で他の無産派藝術運動と同盟し得るのは、
嚴密な意味に於ける反農民的イデオロギイを清算した時だけだ。

復刻の辞

犬田卯ら[1]が農民文芸会の機関誌として雑誌『農民』を創刊したのは一九二七(昭和二)年のことであった。それは、一九二二年暮のシャルル・ルイ・フィリップ記念講演会をきっかけに農民文学研究が盛んに開かれ、諸雑誌も競って農民文学の特集を組むという、まさに戦前における農民文学運動の頂点の時期にあたる。疲弊した農村では小作争議が頻発し、都市部の労働運動とともに大きな社会運動のうねりを作り出していた。一方、政府側の弾圧もこれに比例して強まり、本誌も幾度か発行禁止処分をうけている。またアナキズムとボルシェヴィズムの問題などについて、常に運動側にも思想的対立の要因がはらまれていた。「土の芸術」を目指し、反ブルジョア・反都会文学を標榜し、大同団結をうたって幅広い会員を擁した雑誌『農民』もその影響はまぬがれず、いくたびか創・廃刊を繰り返すのである。その存廃は、そのまま日本農民運動の歴史の困難さを体現する。弊社では、戦前においてほとんど唯一といえる農民文学運動雑誌としてまた農民運動誌として、付録の「農民リーフレット」「農民自治」も合わせて復刻刊行するものである。各研究機関必備であることはもちろんのこと、今日にもつながる農業問題の原点として研究されることを望むものである。

推せんの辞

犬田卯

片々たる雑誌に寄せられた〝百姓〟衆の熱い想い

住井　すゑ

「歴史」というには、あまりに小さな運動だった。

しかし、それでも、人間が生きてきたことのあかしとして、やはり〝歴史〟にちがいない……。

実は、私はクロコのような立場で、誌面には顔を出していない。しかし、創刊から終刊まで、ホネミを削ったことにいつわりはない。平たく言えば、裏も表も知りつくしている。

こんな立場からは『農民』は悲愴の一語に尽きる。それはまさに、日本農民の歴史だ。

そして日本農民の歴史だということは、最も忠実な人間の歴史だ、とも私は思う。

片々たる雑誌『農民』に寄せられた〝百姓〟衆の熱い想い。それは権力の前に

あえなく雲散霧消の形に終ったが、しかし、土に立つ人間が、何を意図したかということの一端は、

未来の歴史のなかでさぐりあててもらえるのではなかろうか？

「農地解放」を目標とし、そのために圧殺されるしかなかった『農民』。

そして農地解放の後遺症のように、今や土から追い払われようとしている人間、農民。

こんな時期であればこそ、『農民』の復刻も、あながち無意味ではあるまい……とは思うものの、

何やら羞かしく、申し訳ないような気がする、まことに妙な立場である。（スミ、マセン。）

（すみい・すえ　作家）

農民文学運動の源流

小田切秀雄

昨日までの日本人は？　昨日までの日本文学は？――この手ごたえ重い問いにたいする答えの中には、敗戦前までの日本農民と日本農民文学とがどういうものとしてあったか、ということがふくまれる。明治以降、地主小作制度を中心とする農村の社会的比重はきわめて大きく、日本資本主義と天皇制との支配の構造的特色を規制していた。しかし大正末年から昭和初頭にかけて地主小作制度への農民の反逆がひろがり、農民解放が切望されるようになり、そういうなかから日本の農民文学運動がはじまった。その最初からの主唱者・理論家・組織者・作家だった犬田卯を中核に、機関誌『農民』に拠る農民自治派の農民文学運動として多年にわたり展開されたこの反体制的な運動は、当時優位に立っていたプロレタリア文学運動とはまたちがった独自な角度から、戦前の体制・農村・農民を照らしだしている。

こんにち、じみに、着実に行われている農民文学運動の、その源流をなすものであるが、それにとどまらず昭和戦前の日本人の生活史・精神史・文学史にとって不可欠の豊富な素材がここにはある。

（おだぎり・ひでお　文芸評論家。農文協「人間選書」の一冊として出版されている犬田卯『日本農民文学史』の編・解説者）

「農民イデオロギー」再検討のために

林　宥一

私が、この『農民』という雑誌にかかわった人々の名前を知るようになったのは、主として渋谷定輔の『農民哀史』によってであった。この本は、埼玉県の農村青年であった渋谷の一九二五～六年の日記を中心として構成されているが、彼は農作業の合間を縫っての詩作と農民自治会運動を通じて、中西伊之助、犬田卯ら雑誌『農民』を支えることになる多くの人々と出会っている。だが、渋谷は第一次『農民』が刊行された頃には農民自治会を離れ、いわゆる「農民」派の批判の対象であるコミュニズムの左翼農民運動へ入りつつあった。しかし、渋谷のこの転身は、

必ずしも、みずからが農業労働を通じて身につけていた農民自治的な「農民イデオロギー」（犬田卯の言葉）の清算ではなかった。解明されるべき問題は、「農民文学」というかたちをとっているが、

雑誌『農民』の最も主要なテーマは、「農民文学」というかたちをとっているが、

「プロレタリア」に対する「農民」の関係・位置ということであったと思われる。

昭和の「農民イデオロギー」（農本主義）はファシズムに足もとをすくわれたという理解もあるが、私は、

このような理解は、「農民イデオロギー」にそくした内在的な分析によって再検討が必要であると考えている。

この雑誌の復刻は、このような意味での現代史研究にとっても意義のあることと思う。

（はやし・ゆういち　金沢大学経済学部助教授）

復刻版『農民』概要

全五巻・別冊一

A5判・上製・函入り・総一六、四五〇ページ

本体揃価格八五、〇〇〇円（別冊のみ分売可・本体価格一、〇〇〇円）

〔90年10月一括刊行〕

推薦●住井すゑ・小田切秀雄・林宥一

序文●住井すゑ

解説●高橋春雄（大東文化大学教授）

復刻版収録内容（次数は発行所の変遷に従って不二出版で便宜的に称したもの）

復刻版巻数	次数	原本の巻号数	原本の発行年月	ページ数
第一巻	第1次	第1巻1～3号	1927年10～12月	五一〇
	第1次	第2巻1～3号	1928年1～3月	
第二巻	第1次	第2巻4～6号	1928年4～6月	三六四
	第2次	第1巻1・2号	1928年8・9月	
第三巻	第3次	第1巻1～9号	1929年3～12月	三七四
第四巻	第3次	第2巻1～12号	1930年1～12月	五四二
第五巻	第3次	第3巻1～10号	1931年1～11月	五八〇
	第3次	第4巻1号	1932年1月	
	第4次	第1巻1号・第2巻1号	1931年10月・32年1月	
	第5次	第1巻8・9号	1932年11月・12月	
	第5次	第2巻1～6号	1933年1～9月	
別冊	解説（高橋春雄）・総目次・索引			約八〇

※発行所――第一次＝農民文芸会　第二次＝農民自治会　第三次＝全国農民芸術聯盟
第四次＝農民自治協会全国聯合　第五次＝農民作家同盟

○弊社は注文制です。
お近くの書店へご注文ください。
○本カタログ中の表示価格は、
全て消費税を含んでおりません。

不二出版

東京都文京区向丘一―二―一二
TEL　〇三（八一二）四四三三
FAX　〇三（八一二）四四六四
振　替　〈東京〉六―九四〇八四

1990/9